加茂

宮内省書陵部

明治
40 6 21
宮内

ミヤコ
ナニ
ヤ
ヤ
ヤ

ゐへば、まして清中ちぎりは猶よ
ほど思ふ立て都の不義へと急ぎ
ぬ。さて宮づかへ、宮のうぐひす、未明
より、ひとつ振袖をとりもる出
て、行方もしらぬ雲
井や、久しうの間の都れ山伝

ひかたちの宮仕へ、ぞ、ートブラコウ
ちぎりは、ソ、ニ、ソ、ウ、ニ、ソ、ニ、ソ、ウ、ニ、ソ、ニ、ソ、ウ、ニ

稜び咲も涼き夕涼よ心もそ
めるれ柳のもち瀬ゆぬるみ
しあまぐ涼す狂はまま振神
よあゆとぐとらぶ月の宮居く
もぬ心う那頼む祭入も
洗神よよるべ代どづを波よよ

上五

神手洗のもも夏の
ぎわ代もの梢すり加舎
りゆ子親郭ぎ枯てみ行
ぐと一面り村雨雲も加
ぎりゆづ入夏るき水の河
隈くまぐりもけぐ代ぐ

加茂

（年月）
めるに成（シテ）水仕女
と寄申べき事なれ　是も世間
うつりて小見物申さぬ古くせ
あるまじく（年）より世を清みて作
ぎ　ぎるまじく世後には知
是ハ播州室の羽柴の弥藏の

去りてはうづめ者拙よ来
まてはぬ先を見成河島とん
れば　おもしく壇どつを白丈（シラユ）
綿と向羽の矢をとる。剣（アマツサ）へ渇（カツ）
伝（ガウ）の者まりをたりぬ。ひろも
何と申ぐるを作ぞ

扨き室の明神ばかりは皆手清ま
ていろぐやの又男きまる古天ハ常社
の古神神ものも御神物ものも作
ト ジョク ジル
此古天の古ものまりおろ高
フ ト ト
まる古ものなりものも唱伝中
ト ト ト 唱
きせ物ものへ 実者私き御

ものの古ものぎて 者社の神秘ま
ものて 探ぐ者べき其ものまま分
て此天古謂 表語り治よべ
シテ
し 趙づて神乃古ものを
ぎ 数ハ中さねづものを
一貫と見きべ 昔此不義の里

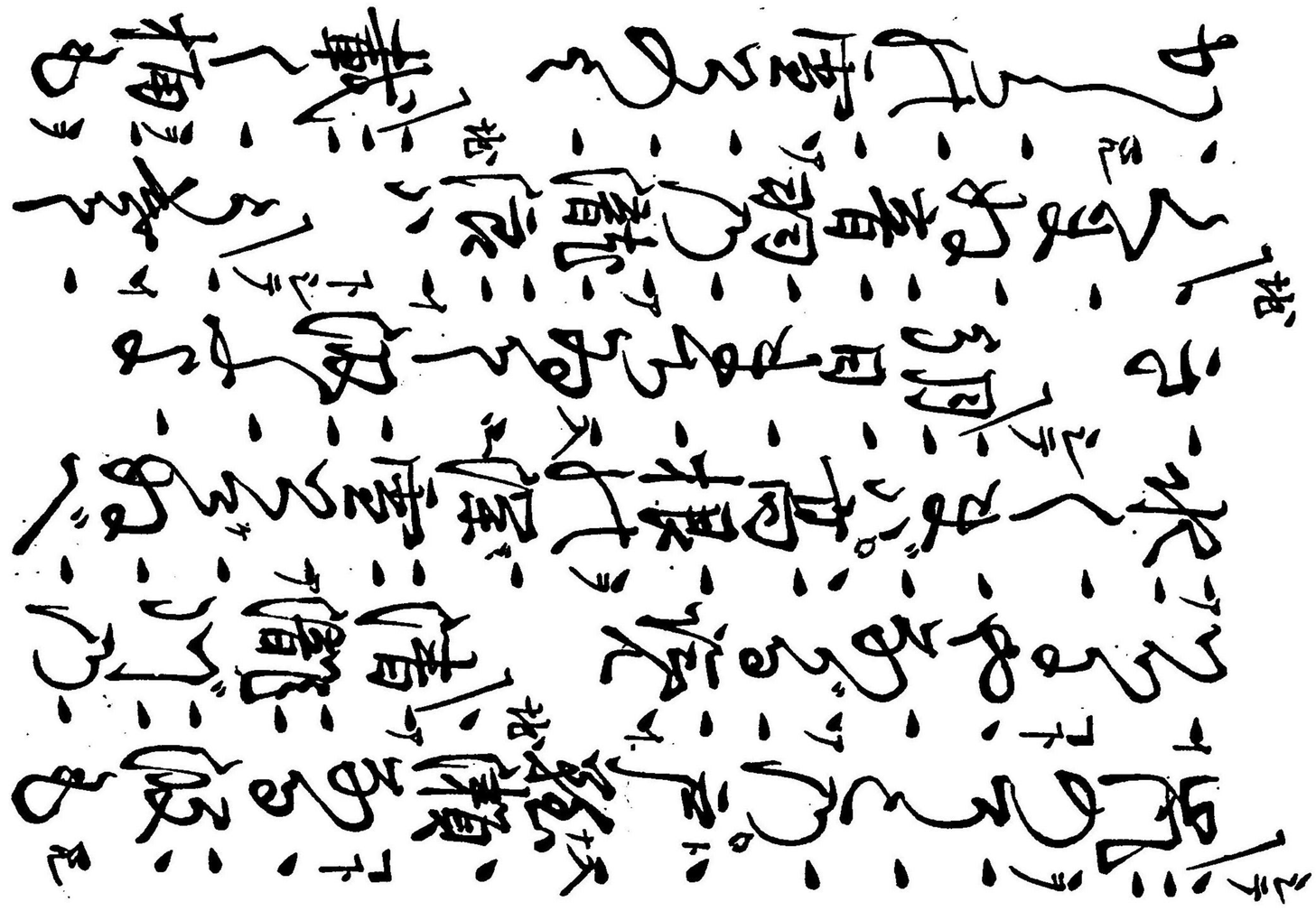
又。秦(ハダ)氏女とゝひ一人弱なる
おはしける島なる出(デ)て水を汲ゆ
手向きるふぜ時この上より白羽
の矢ながれ流れ来り此の桶
より角りて角り菴(イホリ)れの
きふきたあり(カイタイ)懐胎
男子(ナンシ)を産(ウム)り此子三歳と年
しる起人ぐしまとみて父りと
なる人ば此矢をさして向ひる
ぜ矢即まる雷となり天(アカ)るり
神と成る別雷(ワケイカヅチ)神(シン)とまをす
其母さらもかとをまりてが成

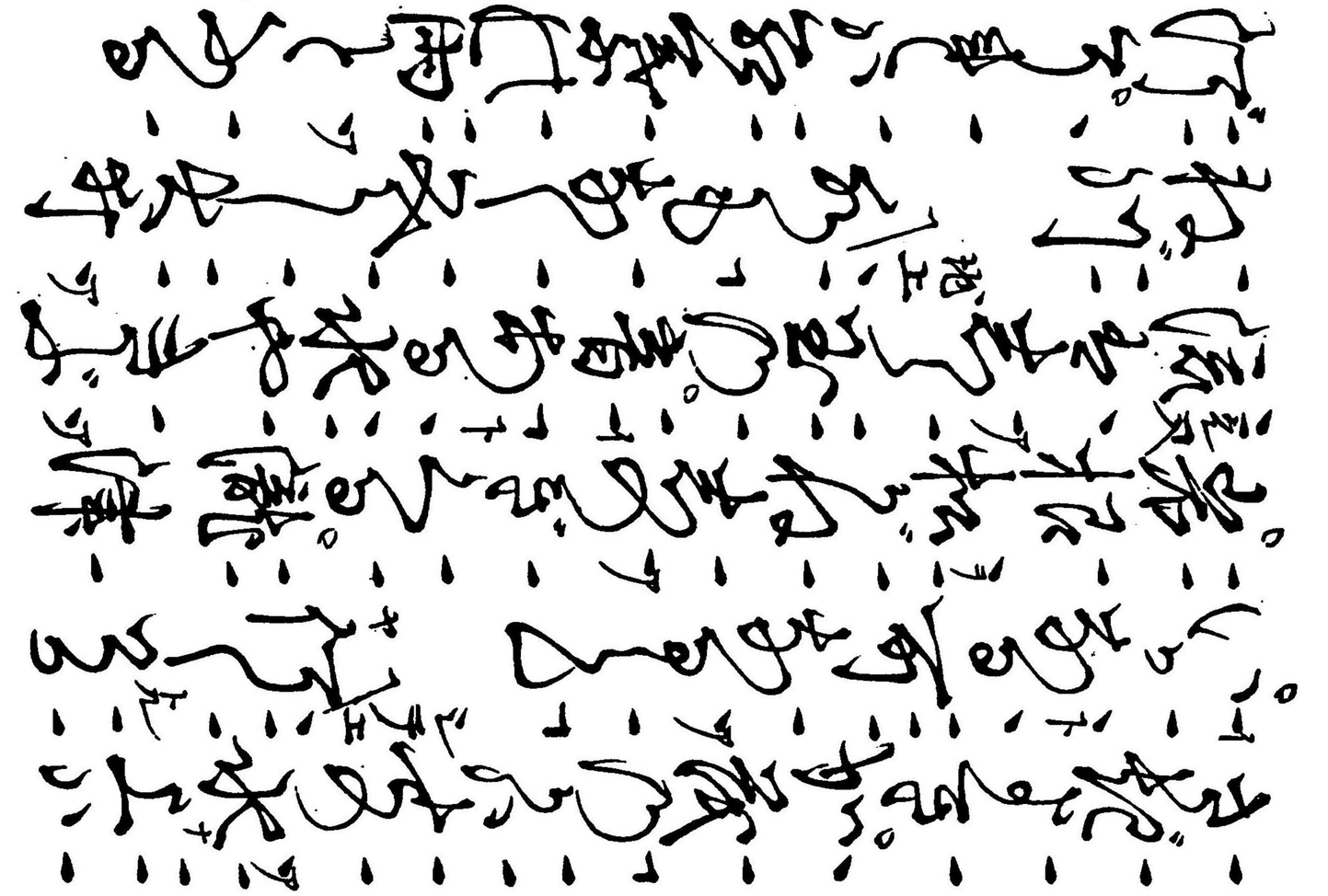
ミてとろの弥生可とも　ちゆ
よ中きばそぐ　かりけ　誠の弥生　秘か
愚なる分よ　わるまへきいるよを
ぱききゆ　面号やらきの人の治
めゝ御代をつぎ　自羽の百万代
のぽきゑも　号筆よ　殘ぐ

ろあり　年記　殘きけば　当年　秘や　扱
こ　　
〻　其　矢　ハ　の　ぼ　る　よ　け　ど　き　の　世
よ　あ　〻　ぬ　矢　も　御　弥　弥　年
る　謂　ハ　い　る
　　宮　よ　〻　宋　審
　　年記
　　治　べ　ぐ　も　満　ハ　あ　ま　ま　ぐ　も
　　三
　　心　か　〻　る　き　も　深　る　も　同

ど流れまの橋ぶみ　かとり河瀬
もかるるかの　ぬかも白河　上
加茂河　又はそうるも
あふる君の　石川やさとのふ
の清たれば　月も流れを
尋ねてぞ　はるもも流るる同

江の流れぬ　何歳ひの
なるべき　計の夫に　早くもまぐ
る也　流れて　くりも河ぬはも
るの水流れ　もつて　絶ぎぬ
ぞ手向する　いざ氷を
河よ　ゆうやゆもい





[illegible]
くれなゐも同じ程なきまつ
日も今日の親ぞうつろふ場
かなるべ[illegible]滑りあるべ[illegible]水もそ
なの神の[illegible]神の[illegible]
心くまよよ

[illegible]
いらなる人やうら
愚也法[illegible]
もの向へ[illegible]面で君を守りけ
社の神徳を若きもめと
き出て

[illegible]

ミ

の法をぶつはちぶ法華ますれ
おあきなるやかるんぶ名計
ハ吉の面弓のやぐとるを神そ
かとゆすしでる立すぎれく
神ぐまみあるきりや神ぐ
くれるるくるきり

長書雅

地

の抑くるやおぶ水のくるやみ可
地を吉のくぶ法界無縁乃応
ぶをぐふぶるとたぼくそる
ひをれやの神徳あぐべし
やおくとぬ古代をぶるあり
ますまべしるべしやおぶ君の

めぐりもあり世時

なりとき、くるる時感應あり

バ歌向徳妙の相好莊嚴まの

あらはみあらはかげやかげのみ

あらはれ作りつる

うつろはぬ袖の水ぞ

してすぐるる高とうる

ほ[ほ]ぬ折うみ汐を動搖

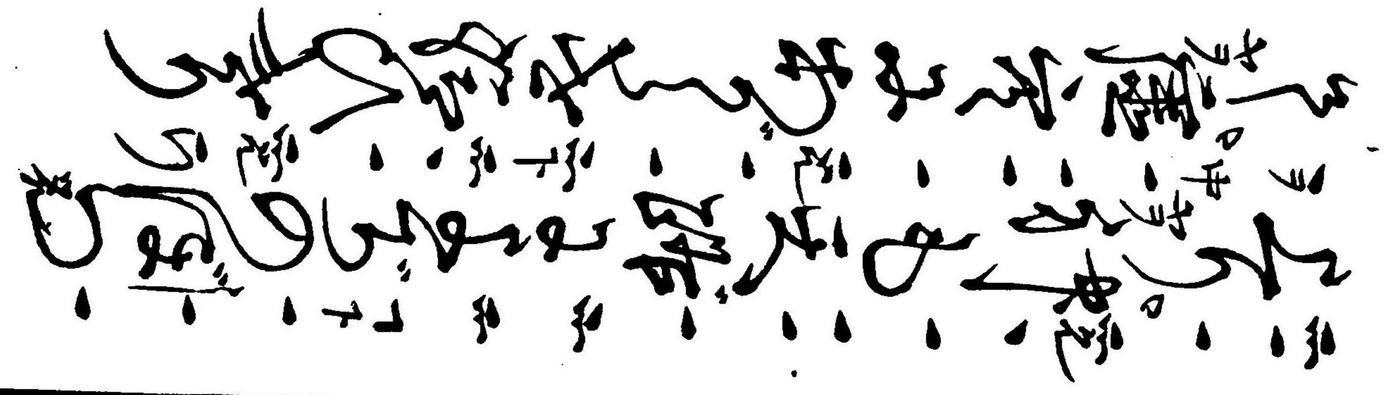
しるすあるわきいら

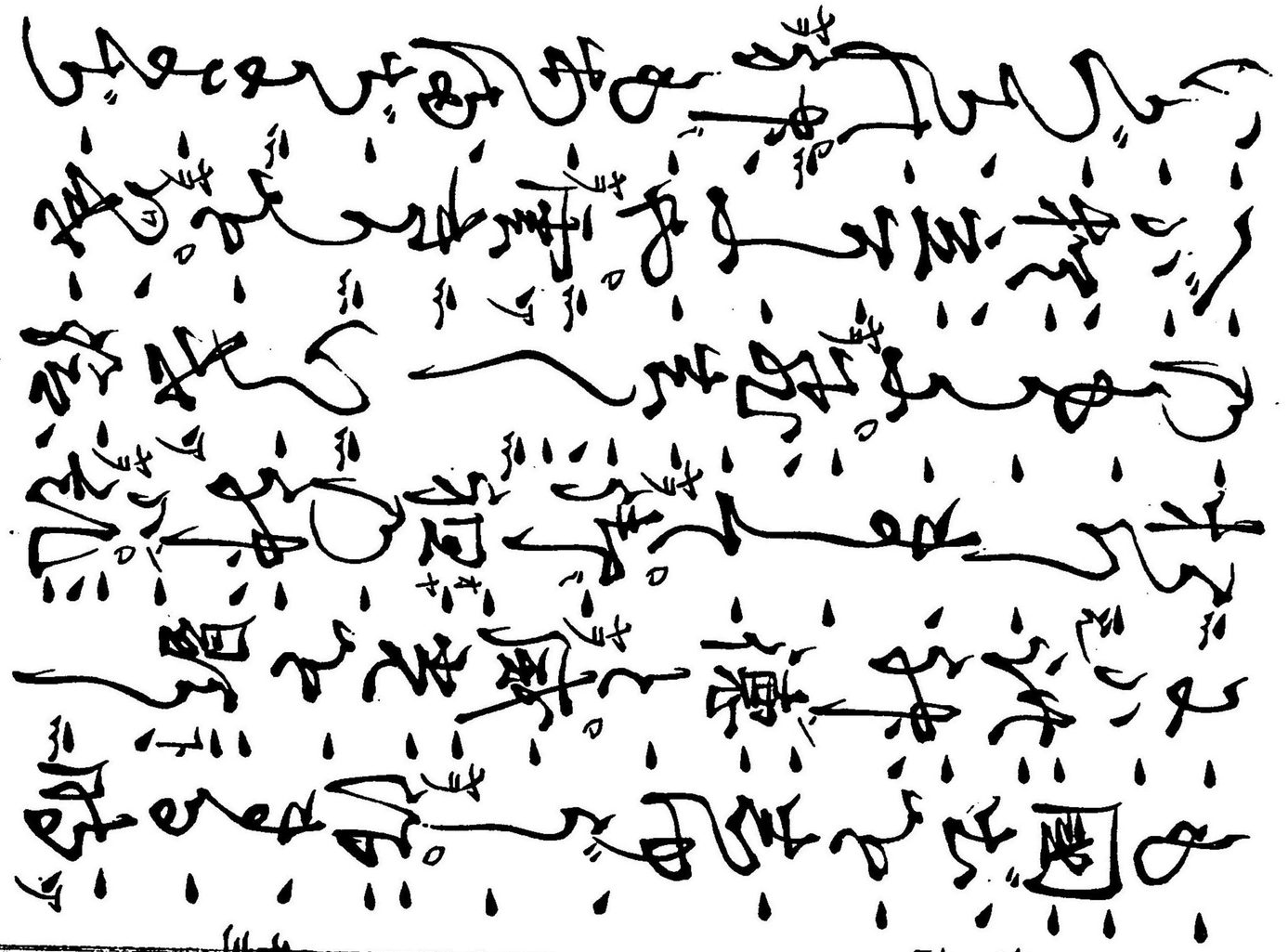
づられ狩猟東限し給へ

我を見る城とまる君臣の

道別雷の狩あり

諸天善神とて、虛空を行
給ふ、又、國ぶを善惡の
方便、和光同塵結緣の法
門、あるべきの事や、風雨
隨時のてうぶ、雲行雨
雷雹雲きりとうぶ、老ち
稱書けいなどの雷すも
ぶる狂ぶふなる、いづちの雨
を降らしてはふる見者も
ぼうぼうぶぶぶと
ぶぶぶとぶぶぶる神
の報の時も見れば五穀成就





俊寛

是ハ相國（シャウ）より仕へ中者なれば。叔
母法皇御座の由いひ
つ為よ非常のゞ赦行るふ
より。國ゞに流（ニン）人赦免あるゆゑ
も罪科ゞ為つ法人の門丹波

ひみ将成経卒判官康頼二
人殺免のため使をばせ家つ
る間俄今鬼界が嶋へと急ぐ
弾をしちぶが嶋なまじば神をい
ちぶが嶋なまじば頼ひもらたの
こりさしみる九州さいまず

成経
丹
康頼
卒判官入
波のみ将成経
道康頼二人が果まるはせ
彰よりそ能野し来清三
ぜ三度ひあかしをおくんと宣
ぬ年よそ半みも殺ぐらぐ

かゝる書流のうたをなれば可然
も宗〻にはやゝ成ぬ貴てのみ
の御りゝ和洲鳥ゝ三熊野と勧
請中都より十道年の九十九
可の宜ぶと
弥路ゝ奴宗と拔ぎゝ宴と

ても同ゝ宮ゝ石と三熊野の
浦の中庵いひゝ侍る麻
宴の志ほゝとそのまゝれ
白宴みゝ浦ゝと散末ゝ
志ゝはゝぶれの人ゝぶ
みゝ茅ゝと宗ゝ

一ヒイシテ　ニ　ヲ　ニ　ニ　ニ

洪潟なるべきかと立寄りしれば
やはらぎ水なるべし　是は伯耆
くべくも出くべ酒と中なかをを
菊華の水なれば醸酒して
ど為るべきと定て是は珍
なりけり長月　時は重陽

可ハ加路　シテ　ヨリ　谷水の　三人　ヨリ　喜狙ひ
七百歳と為も心を汲そ
深谷の　エニヲ月　吾かよ宮も菜
と菊水の　心の底も志絹
けぬまてほはそぶ路のきくの露
のまふ秋もる年をる心を

る。配所は拙き、いつ迄ぞ。去る迄夜
ふきて又秋くれぬるを
も草丈代ぞ去るやあり
宮の昔や思ひ出では行よつきて
も衣松ふ為に勝者
法成寺殿の去れる城の去れる去
ぬ。五衰滅色
の秋なれやおつる木の葉の盃
若酒は台水の流るも又涙
水上は秋なるわを物ぞ時も
は弘限りあり去れ
毋の心よけよ迄るみそ。なるな

やいづ、いまむかふ、いふ沈鳴
よ流されべのぢ、ぢ、ぢ、

あべら特報見状の面を読
て　扨ハ筆者の誤まる
ワキ
いや某都まで家にも康頼成
経二人ハ供申し俊寛一人を
ば流鳴る強申しきりの中なる
シテ上
シテ
て作こそ、いるる罪も同じ
配所も同じ配所非者も
同じ犬報ゆるふ猶りちひの
あるとみられて沉と果まで沉
又ハ
いるる　流程ハ三人一所よりまる
るぶふぢもとそうるきを
しるを義孫鳴ふ者で猶離る

て海さへ
のよるべもな
流すや歌
ぶ計なる
じてハ花も
てハ島も心

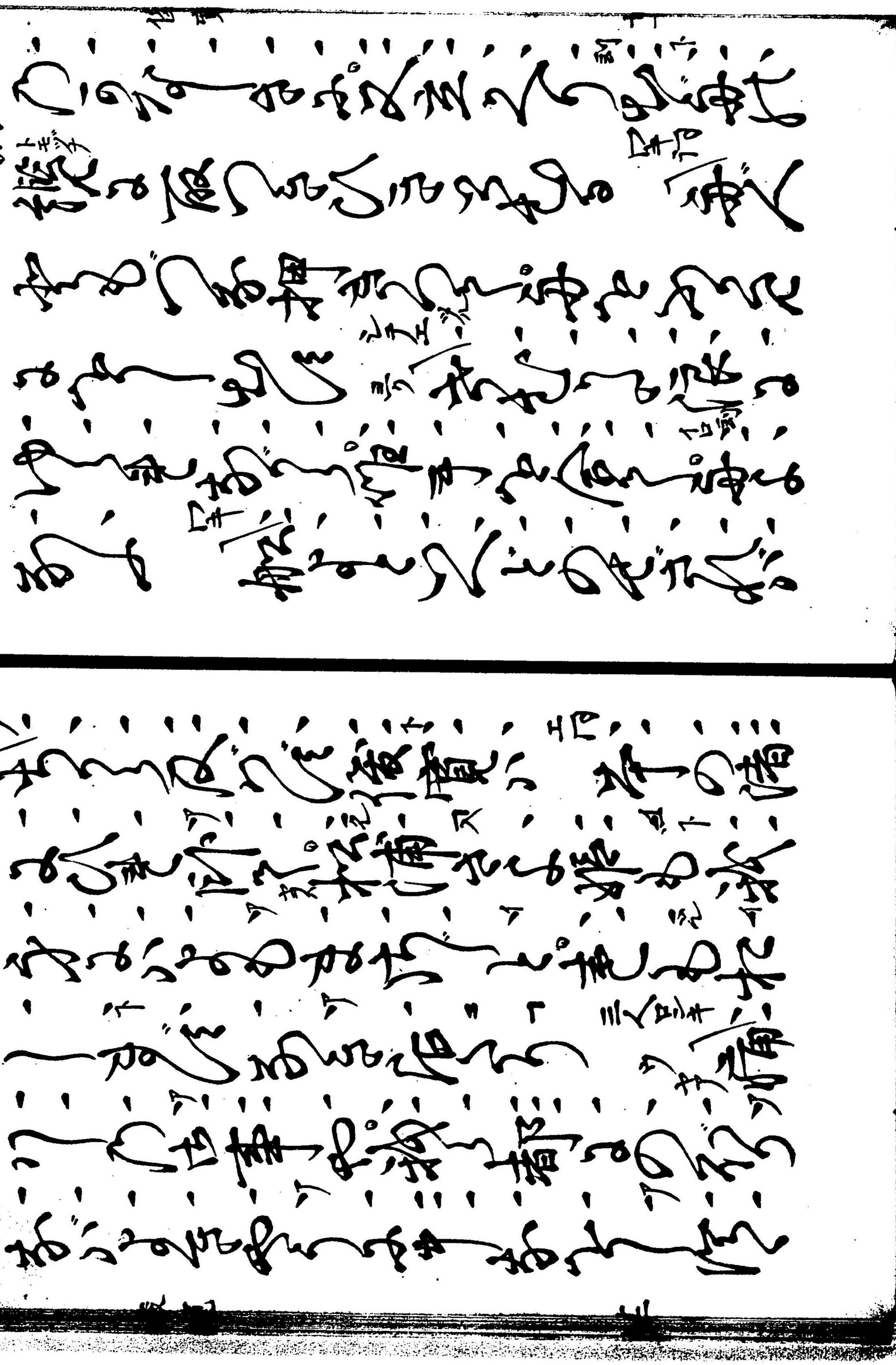
ま
く
く
く

くゝ紙をうつしやうエレテトルニ
もひの御りるやぢきみよみる
者物をゞうひ〳〵き間で法をゞ
呈ゞ〳〵ぶゞ〳〵成程
康頼とゞたる甚ゞ計あるもトル
も畠紙るやゞ〳〵ゞと考ゞて

て、それ去僧都ゞ俊寛ゞるか
きる文字ハ更ゞよゞあゞとゞ夢ゞさ
てもゞ夢ゞるゞばゞさめゞよゞゞゞう
つゞあゞ俊寛ゞ有様をゞみゞるゞ
夜ゞあゞきれ時刻ゞゞゞて
けゞすゞゞ成程康頼二人ゞゞ

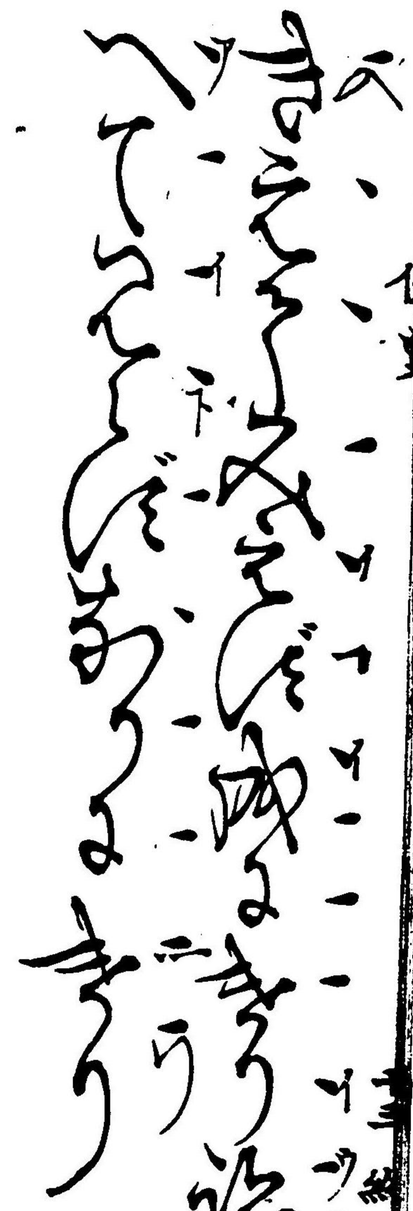
母はれくよ（二人共）（ミル）かくてあるべ
き事なりねばとてあるぎきを
つゝ捨てゝ二人（ハナ）母を学んとて
僧都（ニテ）も母はくんとて康頼の
狂（キセル）（ツヲ）きぶ僧都を母は
かるまじとぞもあるきなく

いひたれば（シテ）ちてやおれば
やきわるとやいふなれあ
きばせめて小家の地まぢか
まとも情を学ばんとて泣へ
情も去ぬ母なぢも櫓櫂（カイ）を（シテ）
まとらんとて（ミル）さたを命



やうて陶潛をみるべし古心づよく
俳諧へ歸洛をまてよりもの
よびまた辭もあるを東をまを
つ陰よ言をまつきけて世ゐ
ふり　同やい　このふと夕涼のぞ
ゐきでゐ俊寛を　申なを

さぶ猛もあ　かあるで陶潛
るべしや　きふ物　ゐるく
ゐ　頼むぞよ頼をふを
ますくよくやきも安も
ぞ筆よ言をざるおきつ波の池
ある詳くくて毋俊も人新も



松風

見せ諸國一見せ僧よそは我
ま西國をみぞ猩々ぜ度見
ひ立西國行脚と表そはあ
らゝまゝやと意て猛ゞ尼ハて
や津の国きの浦そや中

いづれもあるいは歌をとくまづ横
有ぎれる松のかげいう横謂のか
きやうはいまだ詞あらはれ人な
寿びやと思る作　扨ハ詞松ハ
いまへ松風村雨そで二人の
あ間の同道やゆ痛りや其分

ハ出中ふ握まぬ犯ぞもぞハ詞
る世の志るしてかをぬを
の松一丈緑けれ秋をのとをとと
の夜さよりの御うふ謡会仕て
帰ひらくバ宮秋の月けなひ
そて程ふ言ふはあの山寺

の里までハ程遠くは程なく是
成あ間の塩屋より立より一筋を
明さばやと思ひ
こうしつゝ
車ごろもあるゝ世をめぐるなるら
ゑ
なさよ
ゑ
浦月ちく濡ぬるもやまの間の
ゑ
ゑ
ゑ

心ぶくしれ秋ぞ海ハまさる
きゝもぞ行年の中納言
ゑ
関次と詠めぶくハ
ゑ
あくれよるハ宮ちき海
ゑ
士の家里部まる通路の月
ゑ
より外ハ友も高
ゑ
宮やう

きせのわぎ　まぐらばよつるき
海士ふ舟の　濱うねる　雪の
せふ位うや　いとうかの垣
汲車　よるべまぐらの　紫べのそ
でたふ思ふ　をほすぬらろふ
かりうの　ぬるさゆる　雪の

やすらくも　波の月の
び垣をいざ　ねぬよ
歌をうつ　秋海棠　恋べ車
をひ垣の　ゆる　猫もぐるまの
いてすぐまち　ふたつべき　野平
つまで露　まぶ日　新よ　ちくも

うすべきふる日はいとべよりは
もかく海士のまてまよしづく
よ打まちりて波のしづく
白やあまてしもまつ月の雲
あ面の浮とは出みて。げよちく
さ紀漁あのづ者出ある月かか

ぼかりの淡やあ不島野多恒
思ひもも宝かる河れ秋あり
きり長心まどけよしづくやあ
しだく恒と波ろろぴよみ
ちひの塩衣の袖をもし
で肩より者ほろ受るあと

ハ世もくづれ　ぶしそれそも
なぐる海　上方　よるとふかくるや
ほ　波ハ　三島の田鶴とそ
立さりぬ　四方の風も音信
長寿仁とす　すぐさま便行月社
さやうあまそ　波を見るもや燒

きほ煙うろきよりぬ　ぬくまで
海士人のうらに　きれのとまそさん
松島やうしの海のあ海の月なだ
よ歌を波うそうろあ
上旦三地　そうぶを者陸奥の其ろや
ちうれきほぐ海　時ぐ握ぶを

たこびとぎの浦より塩
焼く海人の海人のなりわひ二度
世をもしぬべし　松の村雨
月は堀路やぎ、きくあるらむ
すまひあるらむ　海ならふなるほの
松ぎぬ月らうらうしあれのわ

満ぬの塩くさ　ゆうぶ人
よやぢもつぎの　ぬ
る塩を汲　きぬぬ月
弦掛はあまも　見みも月の
ふるや　れしも見も月
あり　月もあ　かぎき

みちのくにの塩竈の浦より出る船
をのせて、
路ちかや　キ　きぼやの主の特
まてしは宿をかりぶやと思ひは
いふ是成塩やのうちへ案内
中作　ツレ　物語り濃りはじめ

キ　思ひ諸國一見の僧まうす作。一ナ
夜は宿をかりまく　ツレ　指南仕
はべるは其由申はべるべしいふ
中は猿ビトの古へはべる一枝オ古宿
と仕は　シテ　御ありよく考き塩
屋みちは狂ひ出ぬ宿は叶はまじ

きゝ中へ　主は其すゝ中て
ゐへば。拾屋の門見者くゝ程
よゞお宿ハ叶すゞき由仰ハ
いやゝ只者ゝき者ゝうゞ
る。此家のうちとみるゝゐへば。年よ一
夜を明ちきゝ治りゐへと宣て

ちゝ中へ　いやかあひゐます
ゝ婿ゝ月の夜歌を見ゝてまつ
まゝば世を捨へゝ人ゝ　ゝかゝ
海の家。松ゝ　ゝ拾ゝ行ゝ
ちゝ世さゝそゝと思へゝも若ゝ
あゝりて　ゝ中へ

世方へ古へ（ワキ）「蒙られ」や
さぶかりしまゝよざるをみては
（シテ）「拾ひ」をも宿まゝき度ハくひつき
ぞもの物ゝよくゝ考くゝは猛ゞさ
て、あるゝ中てハ（ワキ）「御志者」猛
ゆゝ家ゝ中旅とゝひ泊りゝ

べきゝ分あゝねばいづゝを宿を
定むべきゝ其ゝ上世ゝ間の海ゝ
心あゝ人ハわゞゝも住てゝそ
住べゝれゝゝ（ト一ニ二三四）ゝ月ゝ人あゝぶを
海のゝゝみゝぢゝ（ぼ）ゝまつゝよゝ
とゝゝ人ゝよゝゝ行年も詠ゞ海ゝ

しやありぞ。のれ孫べよ一ト末の
松乃はを人よ寿ぞ。松門
村雨二人乃あ面の旧跡ぞ。中
は狂よ。逆縁あぐ。昂ひてそそ
通ぞはひつまぞ。意かぐぎや。松
風村雨の字をやてぞ。二人

世ぞ悲傷ぞ。昔ハ行とやる
る字みてはぞ。
内ぞあれば。己かよ影きさよ
らぞやぐぐ。ふる内人あぶ
乃古和泉ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。作
ひぞ。杵執心ぞ。そんぞの涙ぞ

とゞ袖をぬらしさふらひ畢

猶心はせんぎの涙とゝのふ世

なるあきんどをば世をばせゝわ

りの事もあるつゝしひあるべく家

は富み住へば二人ともに

名をたゝるなかれ

恥ずかしとすまばわるくはなるとも

人もあるき論のぜみ志ほゞ及

てうるまぢ面の根めかり書

心ゝ為ねうへハ仕ものを

つもべきぞ見ぶるるべくなる

あれ松陰の者ものさ次

やそれまくをつる松村雨に
人の女は出雲国にまりくら
ぶも行年三とせ程つまづ
きけれ所紅あくびのくろふ
き面の面ずしをそらぶあま
ひ女よだむくびそらられませ

つ松ふもけるふあまやを
て松風村雨と言れしすりの
もなるき面の海士はし
やき衣色替くかりけぬの
そぶきあり　かくて三年も
色ゆきバ行年都のぼり法人

いく程なくて世をいとやう去なる
ぬと聞すれば
袁京しやも去
るべくもあらぬ世れ去づまを
松風も村雨も独のくぬきてよ
しまやおぶふをもあぶぬ京をを
へまを面の餞りよ。つをみつ跡吊
ひてらび給へ京まぶ露も
まもひも乱きつ心粗氣な
まれ衣ぶ紀れ見ぶひやよ
でけ。神ぶ考ひも涙のよ
袁よ濡ぶ袁
いすへを思ふいづまばなつ

やゝ行平の中納言のよせい愛な
きあまのうらゝ都へとり帰らば
沈淀の底にてこそ立ちぬべ
特衣と。強宜敷へぐも。これを
又る度ごとに。やすの男のまま袖
ぎ濡る袖ぢ結ぶ。涙ぞ。乾られ

らそ。あぢきなき。世をうゝ今か
あぢきなく。わがまゝ。陸
も。なんと。後しも。恋ひや。
思ひ。狂ひ深き。青ゝ。ぬぎ
て。脱ぬる。衣。かきぞ。乾む
同じ。世を。位。ひあらそ。忘れ

ゐとつゆ、ゐ、ゐ、ゐ

を粉。忘れ給ふぬぐやあまも松
みそらうひへ行年は古へもき
ぬぬ物を らしてれ人の
いひごとやあれ松らうは行年よ
ぞうひ言ばかるもも松
うきうび婦らんとづね法

ひい言の柴ばいふ 言まふ
忘れ給ちぬ袖ぬぐや袖ぎ
はわるもずすがもやの言
乃柴を こまはれ忘れぐ松
凡れ立向りうん古音信 袖
みもきうば村雨れ袖ぎぐ法

浦さびて　まつかゝるで海人と
ば　蓬頼もしけれ　侍らばや
月こそ入りて　立わかれ　あばれ山の家は
ら　松　きらぬ　帰るこ
月　ぞ　ぬ　き山松
見きまつ　君　海の

浦さびて　松の行平　立ち寄りとば
我も　浦　だ立ちてぞ海
き松のまつ　松は恨く
る月もきりぬ　てぞ海人に
浪　きぬ　安執の
めよ　ゆる　拙あ

び浦へ出て海辺の景色を
眺めつゝ行くに
むかし閑路の島もこゝにあるべ
き筈なれども村雨
ときしもあらで弱くもとゞ松風
ばかりやのこゝを通りぬ

十八編

西行橋

西行橋

ひ侍そたる橋ばかりゝ山路の
雪ふる景色かな 男子フト
加様なる者パ
京島迄ハ位居仕る者みゝは拙
も拙き歌ばかりの花
を詠めぢ野ゝ日を送

又明日東山地蔵堂に詣
見侍りぬ今日は又西山西行
の庵室の荒廃するす家及
作狂ひたる人ぐとうもあり
作今日西行の庵室へと
云作百余島ばかりなる山を

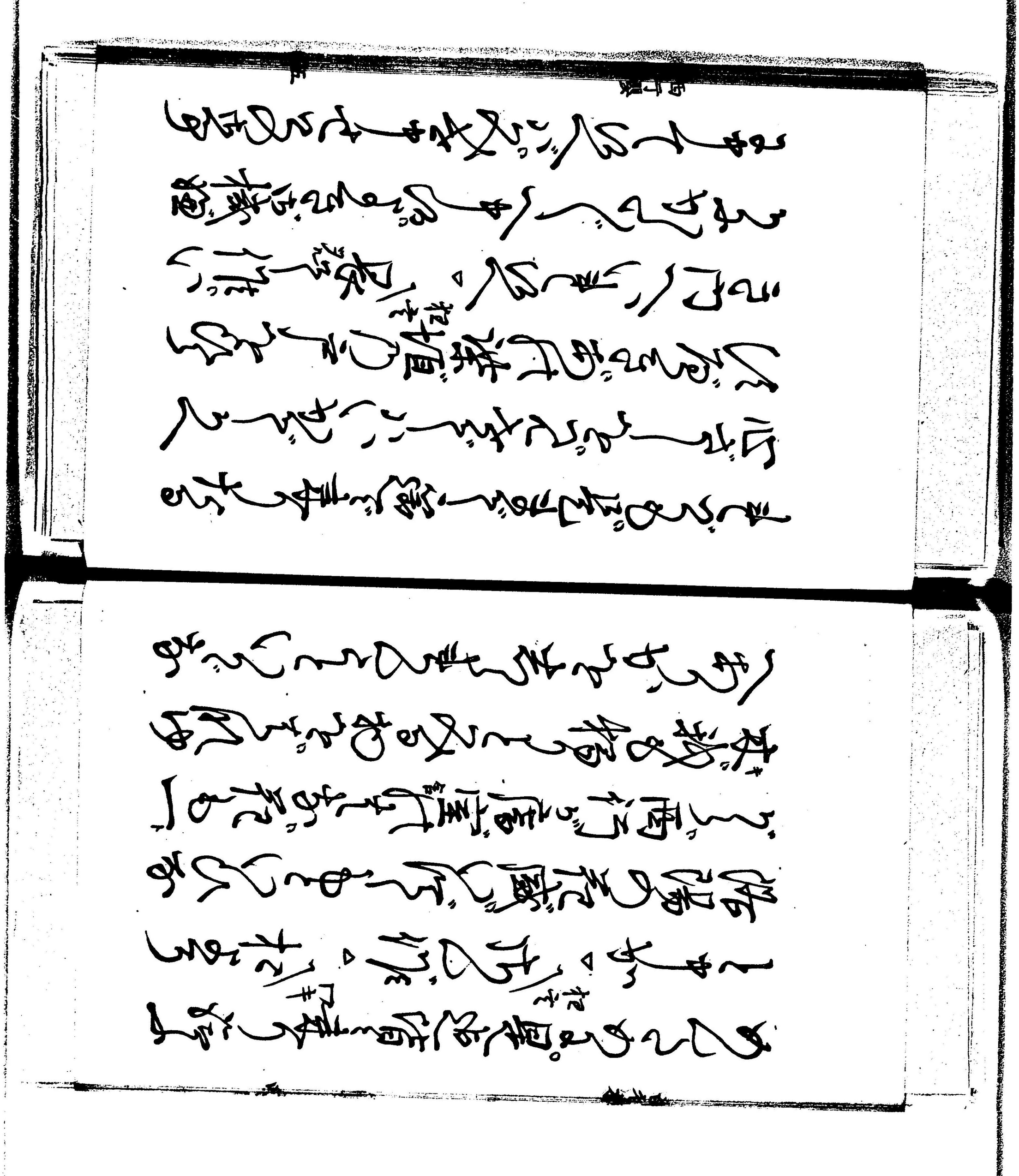
おぐとみぬ
取へ
よりぐすりて
らぬもとろ
あり
きはたる西行の庵室は荒

いと清げに古侍作へ某業門を中
ちらぎるみちしばいふ業門中く
男
和さ
ゆかみて濃りはそ　さんだこと
きしい教方の者みちはらの所
菴宮合花盛なるよ家及で
るぐ見まで　まりてはそと

和さ
古さきく安き間の古ゆみち
はくづも樣制すてちきあぐぐぢち
ぐんをみちて中てそちぎる
男
みてはば清古侍ちく心中は
見サレ
ニニニニニニニニ
ニニニニニニニニ
ニニニニニニニニ
よあちはれ秋の月ば化迷暗の

水はやどる月はうきよをうらづたふ
三伏の夏も冬、澗底の松の風
一聲れ秋をもよほすぎ
丈圓伏のうらに見給ふ法の
結縁ゆゑ古あぐる四代時みも
きぐきたるいにしへ宮の折まる

べ一首蓮華王院の日記
の御きぐみやてゆきら
いふ中は都より此古庭の花
をたづねすして見ぬ清
御出みるは仏と拝ずり
と申て此菴室に華をなげ



そは狂ぶべきものとへば世
人（男）心は中しる△（刻）桜花咲
きぬ春の日ぬれひより
又、ますぬ（早）のもとみふちに
すれば（三ノ）秋ハ又心とまるてふ
の春ぞ恋花高楽を観じつ

つ（元）物心をまつ庵まそこちふ
貴賤群集の（早）心の花
もさそ（キ）みて むらけまる
かくる者（元）桜（早）ハ可ぬ
いへども
花（元）ト 者おれば 上寺門 さまぐまれの
花（上）ハ花ハ行

と隠家のつ可きたづれ行く
はるもづもかすみやふきまろみ道
もうきせつ人ちぶみるらめを
宮や捨てだるよ世のほるかな
きわをづらぬ行のまろなな
いろ風と見道ろぐ

まり海よ心ぞ人もやさ
きろ法人去あぐら捨ろまも
世乃ぬろてハ花をまること
のもとみぶよきすれぬなか
れるもずろ心の外ものハ花
らんとむきつ人乃ろぐ

中ぐ〜に梅の花、一入、一
下句 入ぬ
あ〜ちこ〜ち、陰くまなきてぶ有
元 ト 元ア
ある人ぶ本の家路辺
イ ロイ イ
てもろこしの花の色
コト イ ラヲ ト ト ラウ
ぶにしてなほ詠めあかさん
シテ
ヨリ 埋ずの人ぞ
ぬるかと思づめぶ

心の花い強くるぶ花こそ
甲和 入 ト ラ ト 中
ともきつ人のこるのこぞあ
ニ ラ 入 ロキヒ
〜〜に梅ぶ
ヨリ 不
思ぶやあくそる花のこ
入 ト
ずより白髪
令 ハ
西行ぶ歌を詠ぎる者模ぶ
羽

しきなるべ狩あり（シテ）是ハ夢
中の翁なるべ今の詠哥ハ心
を牧む寿んとなるまりたり
（ワキ）
ア哥も哥学ハ翁とハ夢よ来
れる人成べしいづれなつかしも
きぬ今の詠哥の心をゝづね

やハ歌よみ（シテ）のあるやゝ安
いや上人の古哥ハ行ふ宮の者
（ツレ）
べきなれば（ツレ）つゝ人のくるのゝ
（中）ぞ（ツレ）ハ櫻の花ハ者を
（ワキ）
扨櫻の花ぶ行やゝ　いやと
れハ作りき世をいとよみ者

よ。貴賤群集のいとうこころを
そそ〳〵詠ずるあり　おもしろ
おぼゆ〳〵世ぢ言ふ。ざしんよは
へそよぐを。世と人のみとみるも
作者人の心なり。非精世心の
世界花ぢ浮世のうぶあり〳〵

ワキ
〳〵。世ぢ世ぢ。ぢ。ぢ。

びるを
くゝ
や老ずの花もまゝあり
枝打まゝ桜のぐれあるよ
しを中ひ花れ精みゝ作
あり花ゝるゝ花宴
つ打ハわまゝれめまゝ國出

皆成佛は法なるべし
孤や上人の御値遇ひうまて
ぬぐらの露あまねく花樫前
よ俊ぐ拝しまぐきぐ鳥枝か
み鳥てあぐつゝかゝ支
羽よ落花を桐律て

びるを
うらどうひ有り
や老ずの花もまゝ有
枝打まゝ桜のぐれ有きよ
しを中ひゝ花れ精みゝ作
有り花ゝろゝ有き寄も花宝
のれゝまゝ国出

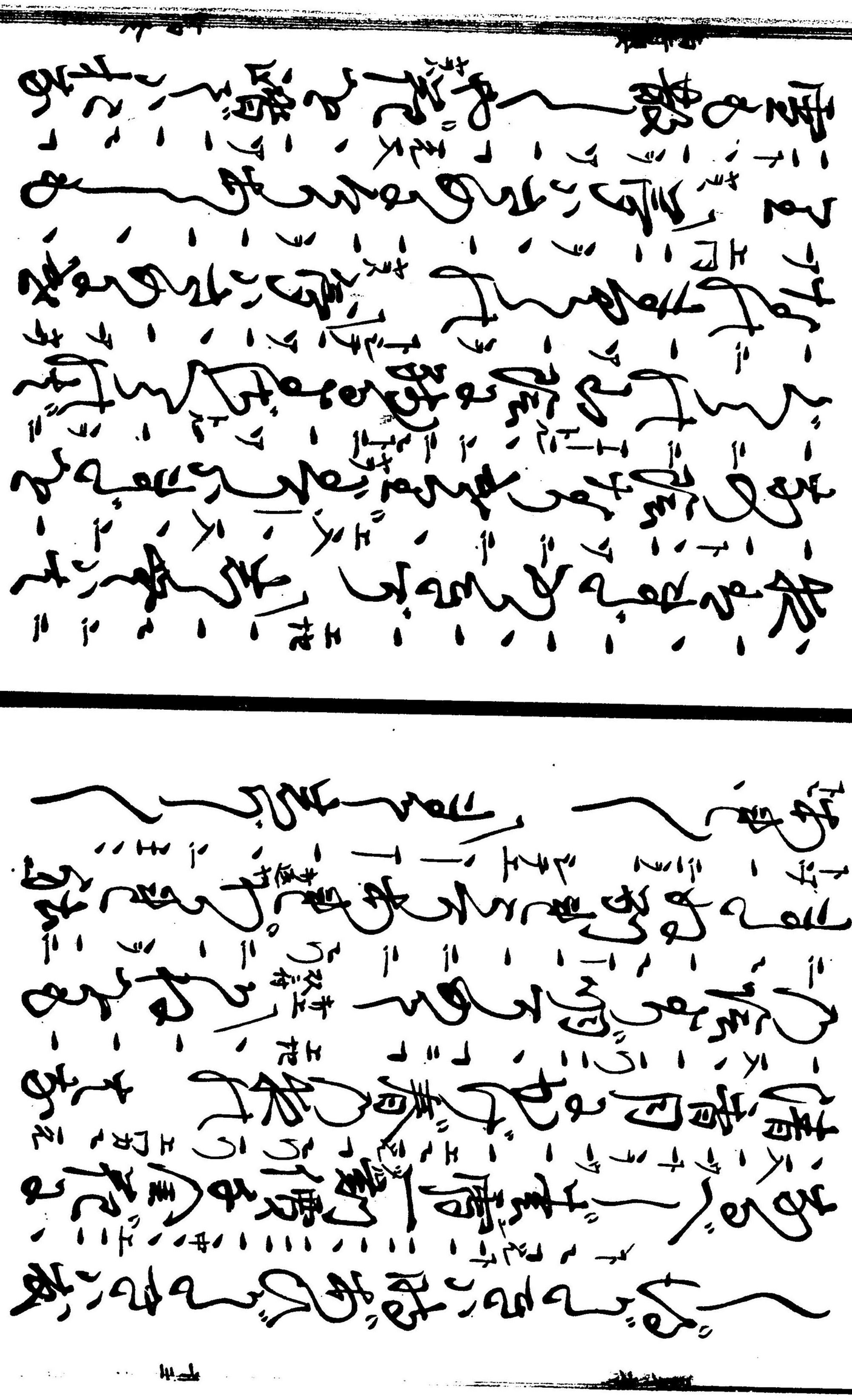
清成佛れ法ある べ
孤や上人の御値遇ひうまて
めぐらの露あまわぐ花橙前
よ愛ぐ拝しまぐ鳥枝
み鳥てあぐつゝかゝ丈
羽よ落花を相俳てい

げ春よ小鳥は陸つゝ一時ふ
掃部　九重よ清きぞも花
のやへ桜じ　世の中とうるはる
きるふ花の名高きぶすづ弘
花を見ぐ者の衛府いや
ぐゝ　わるきぶの柳桜を

きすぞ都が生の錦ざんゝ
ふりる者の桜を拉ちきす
いろを可の山ふこしる者
は花ざり雲路や宮ふのこ新
ら畏み内裏けをざり西王
天の景花も見よいぐ

るべきぐうくあるに、皆中ごろ
う遍昭僧正
いとひ花がつくやま
の花ぬきみつるけさや
まぐ男山きてあふれあり
清水寺の地主桜
ぎ

二月十二日、元日、天
の音羽山ぞ
よわつる滝津
も大井河
こうとして又
後
ば夜の鐘
ひ物情の



ぎ〻惜きみ寺の夜を
明はきりやうの菊ちびて流もあり

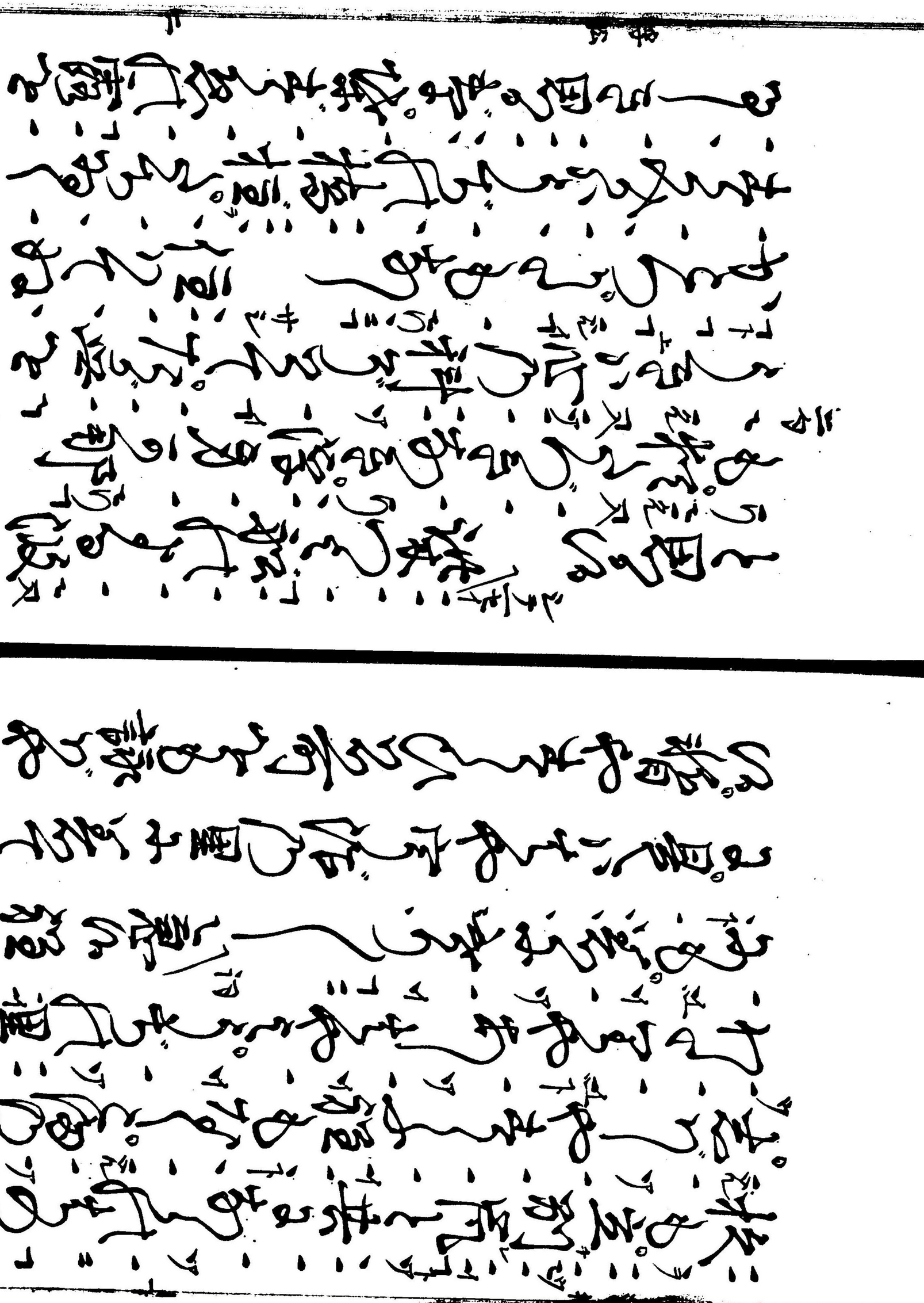
（

浮　松

早内

見ぬ諸國一見僧まで作　我

世狂を初瀬よりぶ見ぬ旅
よりかゝ初瀬山
よのぐばやと思ふ
ぷよう〻寄宿もそ〻ぷ松
夏のよそみ三輪のみ杉ぞ



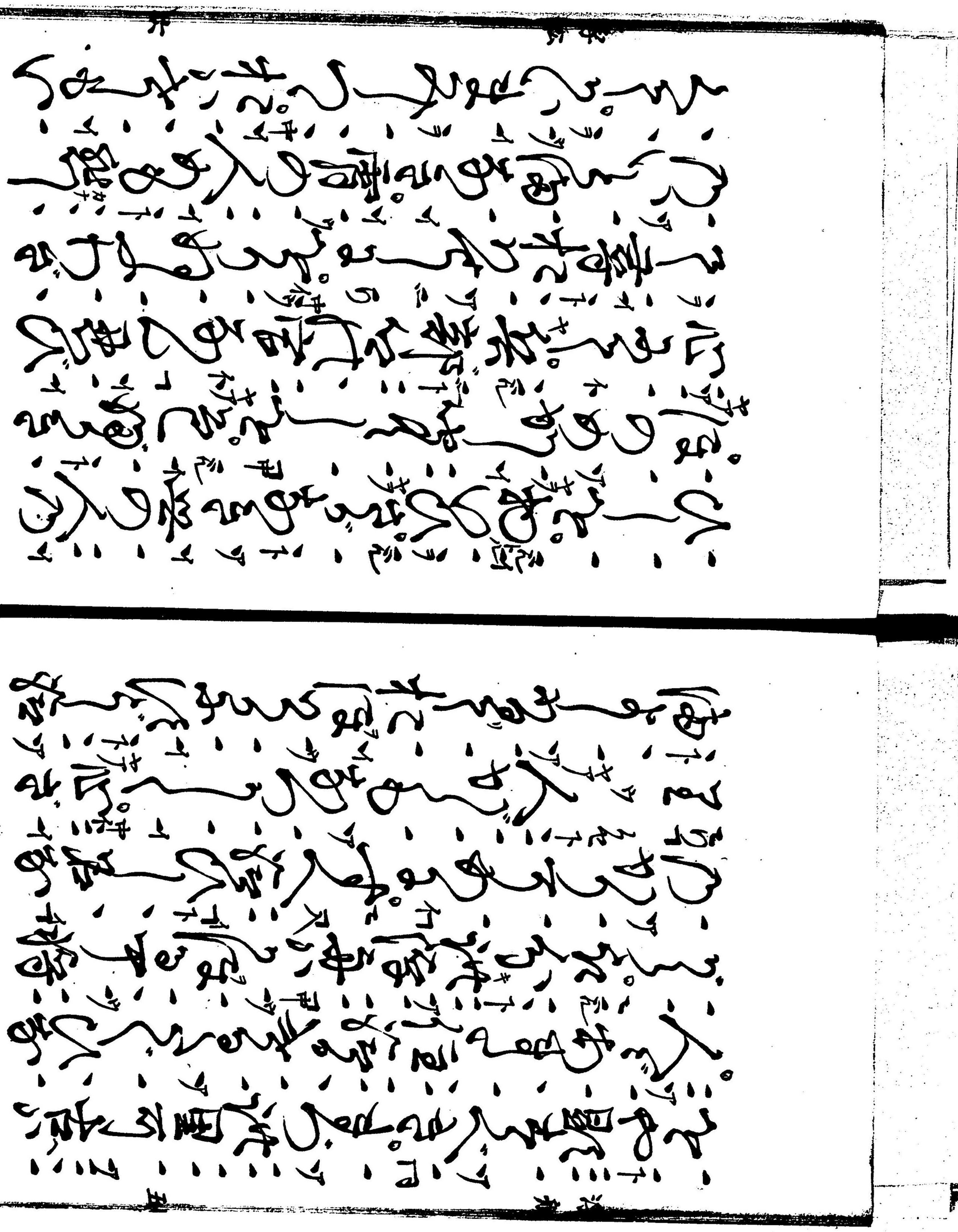
うきなみて。老ゆまも去ま
ゆくもとけば心を歌ゝ書り
みかゝみちゞめ書きよれうぎ
よのもの四方もうきよ行末の
ゝ。神よ行のけひ書ぶ。頼も
をかきてゝめ縄書ぐゝや去

もの。いのゝ話ゝ
き書る女性る事中べき守れる
洲方の事みてゝ行ずまゝ
仕ず洲宮洲の里みとて
ぶへいれる人の位治て仕ず
妻古物語ゝへ可よハ位ゝ妻

賜ふ分すてしらべば無きすを
も去りぬる去あぐる去へ此可る
ハ。浮舟やくハ位浮へ
去り。同女はなまぢ。ぬるもの
あ、ぬうを分るれば。いぐうき
まぐハ去りをべき 日月 宣

きぞ深ぎハ物語。牧。学まるくぬを
ハ。ぬのぐまを。ぬへ。浮ぐきまは
しをふ。心より。浮ぐるよ 女月 む
つ。はを同浮ぐ。星れ名を
きぐとひ。人も社あれぐ
はをハ行ぐと。ハ浮ぐ 上音月 ぢ

あさだちよいうへ　ぷ　ぷ
すべきうちぶれ　ぷ　ぷ　ぷ



とゝのひて成ぬれば
ゆ扱もゝ位の
めづらしき
模の心よりさて有明の月
登る程なるに水の面もを
もりなく松きとめ
そゝ[illegible]の水ふゝとなる道の迷

元仁二年十月十八日

ゆくすゑもあきかぬ古妻
ゆゑなるとゝ
ぬる程よる思ひ
みるふも涙の
よりなる思ひ
なるとゝ
[illegible]

元仁二年十月十八日

晴ぬ詠めと
ゆ擂りきと
ぬ迷なるも
まハそろる

一十元一十一一一

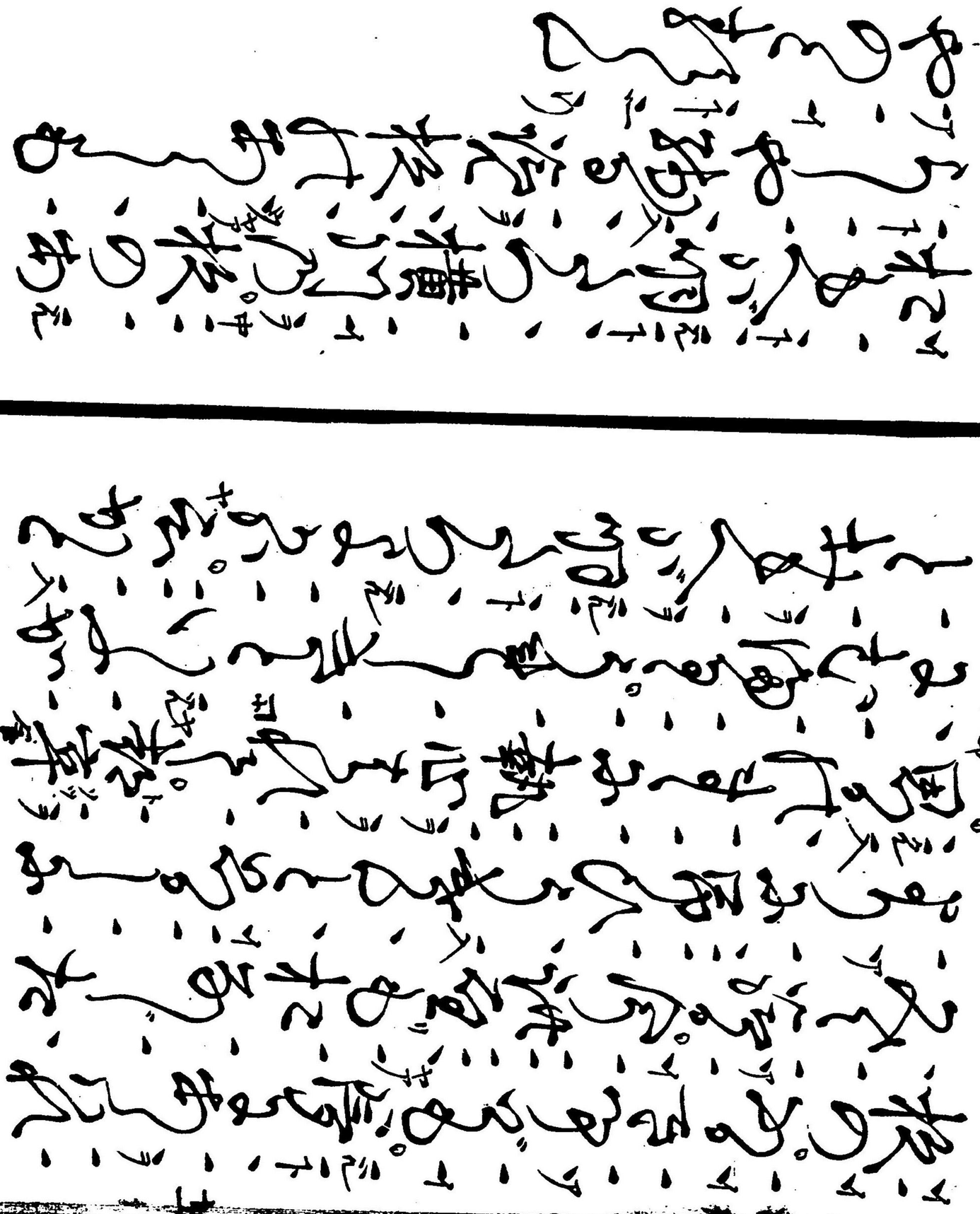
て。脳むらまあんみるみなり法力
を頼し給つ。おまをみる彷中
さんとうきたなつ雲れ給ふ路
行方迷ひ。ぬ。ぬ。ぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

きゑみぞ[甲元仁ナ天ゆ]るべきちぎりぬ[甲元ウ]ず悲
ずしのぶ[元ウ]とりもぢ[元ウ]ぢよりぢ[元ウ]ぢ
きれどすまわぢ[元ウ]ぢろぢとつるを
とたづぬ[元ヲ]ぢ[元ヲ]あるぢ[元ヲ]ぢ[元ヲ]ぢ[元ヲ]



255
73

明治四十年六月十五日印刷
同　四十年六月二十日發行

版權所有

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉（電話番町三百十六番）
京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常助（特電話三百九十番）（振替貯金三五五六）

特42
19
444

253